

IV-30

水環境に関する団体の組織形態と活動状況について

秋田大学 学生会員 ○三浦 紀征
秋田大学 正会員 木村 一裕
秋田大学 フェロー 清水浩志郎
ウヌマ地域総研 正会員 藤田 勝

1. はじめに

まちづくりにおいて住民参加というものが見直されているなかで、まちづくり活動を活性化し持続させていくためには、活動の内容や組織のあり方が重要になってくる。本研究では、社会資本整備・活用に向けた持続性ある住民団体形成の可能性を考察するために、河川空間に関わる団体の実態や特徴を分析し、必要な活動を持続・展開させるための要因と方策を明らかにすることを目的としている。

河川空間に関わる団体を対象とした理由は、近年の河川法改正に伴い、住民と行政の協働での水空間づくりについて、維持・管理・活用に向けて重要な役割を期待されていることも理由の一つである。

以上の目的から本調査では、表-1に示すようなアンケートを実施した。

表-1 アンケート調査概要

調査期間	平成 15 年 1 月中旬～1 月下旬
調査対象	秋田県内 河川愛護団体
配布数	308 票
回収数	119 票 (38.6%)
有効票数	70 票 (22.7%)

2. 各組織の特徴づけと分類

組織の大きな分類として、コミュニティには2つのタイプがある。ひとつは町内会など包括型かつ義務的要素を持つ「地域コミュニティ」であり、もう一つは、釣りやペットなど単一の指標（テーマ）に基づいて利害探求の活動を行う「テーマコミュニティ（アソシエーション）」である。前者は対象地域などを固定化し、地域性と共同体感情を基礎とするが、後者は地域コミュニティを基礎として人為的に作られ、アメーバ的に広がる集団である。回答のあった119団体のタイプを図-1に示す。全体の90%が「地域コミュニティ」に属し、「テーマコミュニティ」はわずか3団体であった。

さらに活動分野を分類すると、図-2に示すように、河川団体のメイン活動である「清掃・美化活動」が62.5%を占めた。これは「清掃活動団体」と「清掃以外の活動団体」に分けられ、後者を独自性のある活動団体として分析を行った。

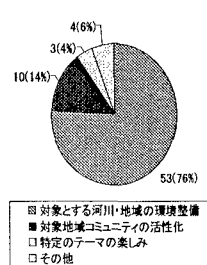


図-1 タイプ分け

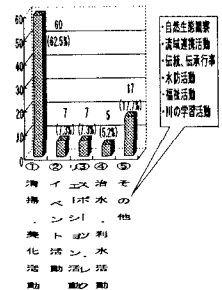


図-2 活動分野

3. 「活発」な組織であるための要因

活動全体における自己評価を総合すると「公益性」「独自性」「周辺理解」「参加率」「満足度」において高評価が多い。図-3は活動全体における各指標の総合評価を示している。そのうち14団体は、地域住民の反応・活動成果として「参加率」「満足度」の2つの要素が「高い」と自己評価しており、これを「活発な団体」とした。

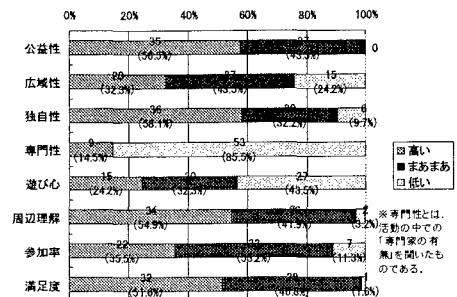


図-3 活動全体における各指標の総合評価

図-4には活発団体の総合評価を示している。活発な14団体の総合評価から、さらに「活発」の要素を抽

出すると、「独自性」「周辺理解」「公益性」の評価が高い。これらの要因のうち、多くの参加者を集め、しかも満足度を得るためには、活動に独自性をもたせることが重要であると思われる。

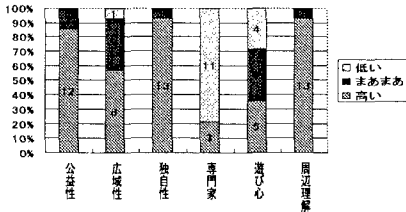


図-4 活発団体の総合評価

図-2の活動分野において、河川に関わる団体は「清掃・美化活動」(クリーンアップ)がその6割以上を占めており、その多くは非活発な組織である。活動内容の具体的記述をみるとその多くは、年に1回の川の清掃を半ば義務的行事として行うような非活発な組織は少なくない。その中で、独自性のある組織の例としては表-2のような2つの組織があげられた。「清掃・美化活動」以外の視点から考察すると、活動内容からも独自性を見出しやすく、また、清掃・美化活動の中でも手法に一工夫をえている活動(※例1)や清掃後に行うイベント・レクリエーションでの親睦(※例2)に独自性が含まれていた。

表-2

※例1) 河川敷で、飼犬を連れて散歩しながら清掃活動を行う。環境美化と、愛犬家のマナー向上に役立つ。(ドッグウォーク) ＜団体名 ドッグファンアキタ＞
※例2) 地区の小中学生が、奉仕の心を身に付ける意味でクリーンアップをし、終了後は焼くこをして反省と交流を通じて親睦を深める。 ＜団体名 出川河川愛護会＞

4. 活動の持続性

各団体が活動の持続性に対してどのような認識を持っているかを知るために、まずはじめは今後の活動の展開に対する意向として次の2つに着目して分析した。

① 同じテーマで活動を継続したい

具体的テーマ(独自)の活動を生かしたい。より活発に持続できることを目的とする。

② テーマが変わっても活動の継続を望む

様々な活動として形に残していきたい。活動の維持に重点をおくことを目的とする。(町内会や自治会のような組織)

図-5に示すように①「同テーマでの…」と考える組織は清掃・美化活動以外の割合が②より高く、②

「テーマが変わっても…」と考える組織は清掃・美化活動の割合が高い。①はより独自かつ活発な持続をしようとする意向がうかがえ、タイプ分けでいうと「テーマコミュニティ」の方向性に近いといえる。他方、②は各々抽象的な目的が多いことから、維持する方向の持続を考えていると思われる。

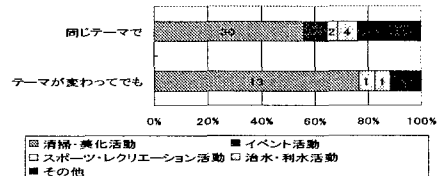


図-5 組織の持続に関する認識

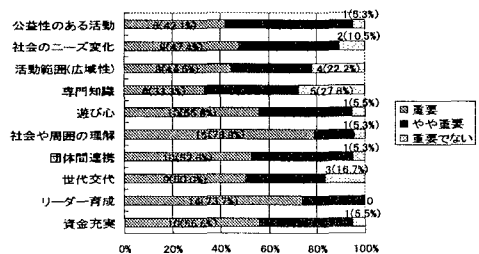


図-6 ①清掃以外の活動団体の持続要素

図-6には①清掃以外の活動団体の持続要素を示している。持続的に活動する上での重要要素の中で①②の団体が共通して「社会や周囲の理解」を重要としており、住民参加でうまく人々の親睦を図るためには、周りの理解があつてこそといえる。①のグループでは「遊び心」「リーダー育成」に関して重要視し、独自性を打ち出す中で楽しみの面が活動に組み込まれている。②では「公益性ある活動」を全面に押し出しており、活動自体の活発さが少ないように思われる。

いずれのグループでも運営の面で困ることとしては「資金不足」「人手不足」「高齢化」「行政支援」などが挙げられ、相談の窓口として国や県、市町村の公的機関を求める声が多くなっていた。

6. まとめ

本研究では、組織の分類と、活発に活動するための要因、活動の持続性について、活動形態と活動内容から分析を行った。社会資本整備・活用に向けた持続性ある住民団体形成の可能性のために、「独自性」をもった活発な活動することの重要性を考察した。

今後、活動を持続・展開させるための具体的なノウハウ等、詳細な分析を行いたいと考えている。